第37回　歯科衛生研究会プログラム

日時　平成24年7月18日（水）16時30分～19時10分

会場　日本歯科大学新潟生命歯学部　アイヴイホール

<16:30-16:35>

「開会の辞」

特別講演

座長　中村直樹

<16:35-17:35>

『 体内からピロリ菌をなくそう！ 』

柴崎浩一（日本歯科大学新潟短期大学）

<17:35-17:45>

質問時間

<17:45-17:55>

感謝状の授与・記念写真

<17:55-18:05>

休憩

一般講演

座長　本間浩子

<18:05-18:17>

1．口腔清掃用具一覧の活用について

〇渡部　泉、金子文乃、風間雅恵、松田知子、池田裕子

（新潟病院歯科衛生科）

<18:17-18:29>

2．ヒトの過剰歯“下顎第３小臼歯”の形態的特徴について

〇高橋正志[1]、森　和久[2]、又賀　泉[2]

（[1]新潟短期大学、[2]新潟生命歯学部口腔外科学講座）

<18:29-18:41>

3．全身症状改善のための歯科治療を依頼されたSAPHO症候群（掌蹠膿疱症性骨関節炎）49症例の臨床的検討

〇森　和久[1]、又賀　泉[1]、土持　眞[2]、二宮一智[3]

（[1]新潟生命歯学部口腔外科学講座、新潟生命歯学部歯科放射線学講座、[3]新潟病院総合診療科２）

座長　松木奈美

<18:41-18:53>

４．歯科衛生士技術の段階的向上を目的とした評価項目の検討

○関根千恵子、遠藤祐香、長谷川沙弥、内山美幸、畠由美子、坂井由紀、藤田浩美、池田裕子、三富純子
（新潟病院歯科衛生科）

<18:53-19:05>

５．患者サービスに対する取り組みと病院職員の意識から検討されるサービス向上の方向性

○片桐美和[1]、金子文乃[1]、風間雅恵[1]、小林えり子[1]、高野貴子[1]、佐々木典子[1]、鈴木明子[1]、榎　佳美[1]、松岡恵理子[1]、藤田浩美[1]、三富純子[1]、大森みさき[2]、近藤敦子[2]、黒川裕臣[2]、関本恒夫[2]
（[1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟病院）

<19:05-19:10>

「閉会の辞」

特別講演

体内からピロリ菌をなくそう！

○柴崎　浩一
日本歯科大学新潟短期大学

ピロリ菌が発見されてから約30年になる。強酸である塩酸が存在する胃の中に、細菌が存在するとは誰もが想像しなかった。1983年パース大学の病理学者Warren教授と内科研修医Marshallらの努力により、慢性胃炎患者の胃から世界で初めてピロリ菌が分離培養された。その後の研究により、慢性胃炎や胃・十二指腸潰瘍の多くはピロリ菌の感染により起こることが明らかにされ、さらに胃がんもピロリ菌の感染と密接に関連していることが疫学的に証明されている。このように、多くの胃疾患はピロリ菌による感染症として捉えられるようになってきた。さらに、ピロリ菌を除菌することにより、慢性胃炎による症状は改善し、胃・十二指腸潰瘍の再発率も著しく低下することも明らかになっている。はたして、除菌によりわが国の胃がん患者は減少するのでしょうか？　本講演では以下の点について解説する。

1．ヘリコバクター・ピロリ（*H. pylori*）について
2．*H. pylori*発見までの歴史
3．*H. pylori*と胃癌の関係：胃がんの原因と考えられている*H. pylori*
4．*H. pylori*の感染経路：母親または父親を介した家族内感染が主
5．*H. pylori*の感染診断：内視鏡を用いた診断法と内視鏡を用いない診断法
6．除菌療法と胃がんの発生：除菌により胃がんは本当に減少するか？
7．研究室における*H. pylori*に関する研究成果
　（1）小児における*H. pylori* DNAの検出からみた感染経路の検討
　（2）各種含嗽剤における*H. pylori*の発育阻止効果
　（3）園児における*H. pylori*の初感染時期に関する研究

口腔清掃用具一覧の活用について

新潟病院歯科衛生科　○渡部　泉　金子文乃
風間雅恵　松田知子
池田裕子

【目的】日本歯科大学新潟病院（以下本病院と略す）歯科衛生科口腔ケアグループでは効果的なケアを提供する体制を整える為に活動中である。H22 に本病院の歯科衛生士のプロフェッショナルケアの問題点を抽出することを目的にアンケート調査し、歯科衛生士の配属先により使用器材にバラつきがあると報告した。また、H23 には多種ある刷掃器材から選択しやすいように情報提供用紙を考案し報告した。本病院の推選刷掃器材用紙に挙げられているものは106種と多種に亘ることから、より目的に合ったものを選択できるように、今回はこれらの特徴・適応に関する資料を作成し、現状の改善点の抽出を目的に調査を行ったので報告する。

【対象・方法】本病院に勤務する歯科医師・研修歯科医師・歯科衛生士(新潟短期大学含む)186 名に対し、口腔清掃用具一覧ファイル（以下ファイルと略す）の活用状況について自記式質問紙による調査を行った。

【結果】対象者 186 名中、歯科医師 97 名、研修歯科医師 23 名、歯科衛生士 36 名より回答を得た。回収率は 83.9%であった。ファイルの設置場所については、受付 46.4%、診療室 21.4%、推選刷掃器材用紙付近 17.9%、その他 14.3%であり、誰が見ていたかについては、歯科衛生士 66.7%、研修歯科医師 13.9%、歯科医師 11.1%、登院生 5.6%、実習生 2.7%であった。実際に歯科保健指導にファイルを使用した 11.0%のうち、94.0%が役に立ったと回答した。また、ファイルを使用しなかった 89.0%の理由としては、存在を知らなかった 65.7%、使用しなくても説明ができる 9.5%、その他 24.8%であった。ファイルの解説及び構成の改善点については、写真を大きくする、値段の表記が最も多く挙げられた。

【考察】今回の調査結果より、ファイルの存在を知らず使用しなかったが全体の約７割を占め、インフォメーション不足と設置場所が原因と考える。また、ファイルを使用したうちの約９割が役に立ったと回答していること、解説及び構成の改善点に多数のご意見をいただいたことから、より有用しやすいものに改正したい。今後は推選刷掃器材の見直し、新規器材の導入など更に改善を加え、患者様、学生への情報の提供及び情報共有の確立を目標に活動を継続したいと考える。

ヒトの過剰歯“下顎第３小臼歯”の形態的特徴について

新潟短期大学　○高橋正志
新潟生命歯学部口外学講座　森　和久、又賀　泉

【目　的】　ヒトの下顎第１大臼歯の遠心舌側寄りの深部に形成された過剰歯の形態的特徴について検討する。

【材料と方法】　24 歳男性の下顎右側第１大臼歯の遠心舌側寄りの深部に形成された過剰歯を使用した。パノラマおよび口内法Ｘ線写真を撮影後、過剰歯を抜去し、ただちに 10%中性ホルマリンで固定した。軟Ｘ線撮影装置(SOFRON)で歯髄腔の形態を観察した。歯冠中位から根尖までの連続研磨標本を作製し、偏光顕微鏡、蛍光顕微鏡で観察した。歯冠の咬頭側半分を、アルコール脱水・臨界点乾燥後、白金蒸着を施し、S-800 型走査電顕（日立）で咬合面の詳細な形態を観察した。

【結　果】　本標本の計測値は、歯冠長が 6.8mm、歯冠幅が 6.8mm、歯冠厚が 8.7mm、歯根長が 12.95mm であった。本標本の咬合面観での概形は下顎第２小臼歯に最も類似するが、５咬頭をもち、裂溝はＹ型であった。近心頬側咬頭が最も大きく、近心舌側咬頭、遠心頬側咬頭、遠心舌側咬頭、遠心咬頭の順に小さくなっていた。歯根は単根で、根管も１根管であった。頬側面には歯冠部から歯根部にわたる深い圧痕がみられた。頬側面の圧痕に対応するエナメル象牙境も陥凹していた。近心面観では、頬側面の最大豊隆部は咬頭側約３分の１の位置で、高かった。遠心面の歯冠中央部にも楕円形の深い圧痕がみられた。遠心面の圧痕に対応するエナメル象牙境の陥凹はみられず、エナメル質のレッチウスの並行条は圧痕の側壁で途切れていた。歯根象牙質の象牙セメント境付近に、１本の黄色の蛍光線がみられた。

【考　察】　本過剰歯は、第１大臼歯の遠心舌側寄りの深部に形成され、咬合面の裂溝がＹ型で、５咬頭をもち、第１大臼歯の形態要素を多く持つ点から、第１または第２小臼歯の歯胚が分裂して形成された過剰歯ではなく、第１大臼歯の代生歯胚から形成された“第３小臼歯”であると考えられる。本標本の頬側面と遠心面には圧痕がみられたが、これは本来の遺伝情報にもとづく形態ではなく、第１大臼歯の近心根と遠心根の圧迫によって偶然に形成されたものと判断される。本標本は、第１および第２小臼歯よりも咬合面の形態が複雑であり、機能的であると考えられるので、ヒトの代生歯の臼歯化の場の中心は第１大臼歯の代生歯にあると推察される。

全身症状改善のための歯科治療を依頼されたSAPHO症候群（掌蹠膿疱症性骨関節炎）49症例の臨床的検討

新潟生命歯学部口外学　○森　和久、又賀　泉
新潟生命歯学部歯科放射線学　土持　眞
新潟病院総合診療科　二宮一智

【目的】SAPHO症候群は皮膚病変に多彩な骨病変を合併する難治性全身疾患である。その原因は不明だが自己免疫疾患説が有力視されており、リウマチ類縁疾患に分類されている。今回、我々は、全身的な症状改善のための歯科治療を依頼されたSAPHO症候群について、その病態解明の一助として臨床的検討をおこなった。

【対象及び方法】対象は、おもに皮膚科より全身症状改善のための歯科治療を目的に当科に紹介され、骨シンチグラフィ（以下骨シンチ）を施行したSAPHO症候群患者49名（男性16例、女性33例、年齢21～73歳、平均年齢49.9±12.5歳）である。これらの骨シンチ結果と疼痛部位、ならびに一部について歯科治療による全身症状への効果や初診時血中微量金属について検討した。

【結果】骨シンチの部位別陽性率は、胸鎖関節が77.6%と最も多く、また頸椎、胸椎、腰椎の体軸も、26から44%で陽性、顎関節部では68%と他界陽性率がみられた。これらについて歯内療法など歯性慢性病巣の治療を中心におこない，扁桃摘出術は耳鼻科に依頼して4例におこなった．予後資料が確認できた30症例の歯科治療有効率は、消失と著明改善を合わせ、骨関節痛では73%、皮膚症状では87%と高かった。

また29症例について，血液中の微量金属の計測をおこなった．分離した血清は，（株）SRLに依頼し，血清中の銅，亜鉛，鉄とセレンについて各濃度を計測した．その結果，銅，セレンで健常人コントロールに比し有意な変化がみられた．

【結論】

1. 骨シンチは、SAPHO症候群の特徴を高率に示し、初期病変にも集積して診断にきわめて有用であった。
2. 本症の皮膚症状ならびに骨・関節症状に対し，歯科治療が 高い有効率を示した．
3. 本症患者における血中必須微量金属濃度は，銅とセレンで有意な変化をしめし、歯性慢性病巣、歯科用金属ならびに生体必須微量金属が，SAPHO症候群の病因・病態と関連している可能性が示唆された．

歯科衛生士技術の段階的向上を目的とした評価項目の検討

新潟病院歯科衛生科　○関根千恵子、
遠藤祐香、長谷川沙弥、内山美幸、畠由美子、
坂井由紀、藤田浩美、池田裕子、三富純子

【目的】当院は研修施設であるため、歯科衛生士全員が同程度の基本的技術を身に付けた上で、歯科衛生士学生へ指導することが望ましい。しかし、それに対するレベルの基準や技量を評価する指標がない。そこで、その指標を作る第一歩として、基本的技術の調査を行い、中でも段階的に技術の評価が必要と考えられる項目を検討したので報告する。

【対象および方法】1. 歯科衛生士業務の中で基本的技術と考えられる76項目に対する調査
対象：1）当院歯科衛生士31名、2）某病院研修施設98ヵ所と歯学部のある私立大学附属病院または診療所、国立大学附属病院35ヵ所の計133施設、3）新潟短期大学歯科衛生学科教員6名
方法：自記式質問紙法
2. 歯科衛生士教育セミナー内容の調査
対象：2009年度開催セミナー
方法：歯科専門雑誌、器材メーカーなどから抽出

【結果】当院歯科衛生士が行ったことがある項目は71項目であった。しかし、難易度が低く、到達度が高い項目は段階的な評価が必要でないと判断し削除した。また、他院では附属病院で1項目、研修施設で20項目行っていない項目としてあげられ、そのうち重複している15項目は必要でないと判断し削除した。新潟短期大学で実技実習を実施していない項目は半分以上であった。
歯科衛生士セミナーは、年間66講演、延べ日数128日であった。段階的評価が多く行われている歯周治療関連セミナーが多かった。

【考察】現在当院で実施されていなくても歯科衛生士として必要であると考えられ、他院でも多く実施されており、難易度の高い項目は段階的評価が必要であると考えられる。また、歯科衛生士学校で実習していない項目に対しては、卒後研修で到達目標レベルまで段階的に評価していく必要があると考えられる。歯科衛生士セミナーで歯周治療において段階的評価が多く行われているのは、難易度が高いからであると考えられ、当院でも考慮する必要がある。
以上から、当院歯科衛生士業務の中で基本的技術と考えられる76項目より予防処置5項目、診査・検査6項目、歯周治療10項目、介護予防1項目など計57項目に対し段階的技術評価が必要であると考えられる。

患者サービスに対する取り組みと病院職員の意識から検討されるサービス向上の方向性

新潟病院歯科衛生科　○片桐美和　金子文乃
風間雅恵　小林えり子　高野貴子
佐々木典子　鈴木明子　榎佳美
松岡恵理子　藤田浩美　三富純子
新潟病院　大森みさき　近藤敦子
黒川裕臣　関本恒夫

【目的】日頃提供している患者サービスは患者が求めているサービスであるか確かめる必要があり、我々は今後患者満足度調査を予定している。
　そのため事前に情報を収集し今後の患者サービス向上の方向性を検討した。

【対象および方法】

1）患者サービスに対する取り組みの調査
・対象:新潟県内歯科を併設している病院 64 施設
・方法:自己記入式質問紙法

2）患者サービスに対する意識調査
・対象:日本歯科大学新潟病院の職員 314 人
・方法：無記名自己記入式質問紙法（主観的評価）

3）患者からの意見の把握
・対象:日本歯科大学新潟病院に設置の投書箱に過去 5 年間に投函された意見
・方法:分類項目を 5 項目設定し分類

【結果と考察】

1）36 施設から回答があり回収率 56.3%だった。患者満足度調査はほとんどが患者自己記入式の質問紙法によるもので、年 1 回実施している施設が最も多くみられた。更に多くの施設で調査継続の意志が確認でき、継続して行う重要性が考えられた。患者サービス向上活動の内容は研修会や講演会の開催、広報誌の発行等の活動が確認され、患者サービスに対する前向きな姿勢が伺われた。

2）当病院職員 281 人から回答があり回収率は 89.4%だった。意識が高い傾向にある項目は身だしなみ、患者対応、規律だった。また、病院案内に関する項目においては関心がうすかった。肯定的回答が多くみられ評価基準が低めに設定されている可能性が考えられた。今後職員の客観的評価を適切に得るためには評価基準を設定する必要があると思われる。

3）過去 5 年の投書内容は好意 21 件、不満 73 件。いずれも人的対応に関する内容が多かった。職員の回答では患者対応の項目において意識が高いとの結果だったが、投書箱から人的対応に不満な意見が多くみられることから職員と患者の認識の違いを知る必要があると考える。

【まとめ】　当病院職員の意識を把握し、他病院の取り組みを参考にすることで今後の課題がみえてきた。当病院の患者サービスに対する基本的な方向性を具体化していきたいと考える。